

親の声かけカード — 予習シリーズ 理科・社会（汐里）

主に使うのはお母さん／1回＝1週間。目的は「自分で読んで理解し、自分の言葉で説明できる」こと。親は答え（内容）を言わない。

北極星＝説明の質：本を伏せて、自分の言葉で言えたら定着

1回の回し方（場面1～9）

1 とびら	「今日はここ（テーマ名）。この質問、なんでだと思う？」→予想が出たら「本文で確かめよう。お母さんこれよく知らないから、後で先生（＝汐里）に教えてね」 最初に"お母さん＝生徒"を宣言。予想は覚えておく（場面9で答え合わせ）
2 読む	「まずこの(1)のところだけ、図も見ながら読んでみて。読み終わったら本を閉じてね」 読む単位＝小見出し(1)(2)(3)の1つずつ。回まるごとは読ませない
3 説明させる	「じゃあ先生、今の(1)、お母さんに教えて。何がわかった？」 相槌＋理由を引き出す：「へえ、そうなんだ」「それで？」「それ、どうしてそうなるの？」 「わからない？」でなく「わかった？」。理由を聞くと説明が深まる（当否は問わない）
4 詰まったら	「その答え、本文のどこに書いてあった？ もう一回開いて、探して指さして」 答えは言わない。責めずに"探す"へ戻す
5 あやふや・間違い	「なるほど。それ、本文のどこ？ 指さして、そこ声に出して読んで」→読んだら「今読んだところ、さっき言ったのと同じこと言ってる？ ちがうこと言ってる？」 「違う」と裁かない。本文と照らし、"同じ／ちがう"を汐里自身に判定させる（誤った箇所を指した時の保険）
6 苦しくて動かない	答えは言わないまま、段を下りる： ①範囲「どの小見出し(1)(2)(3)の話だった？」→②位置「その中の、最初の数行？ 図のあたり？」→③読む手伝い「じゃあ最初の一文だけ、いっしょに声に出して読もう」（＝場所と音読の補助。漢字の読みを教えるのと同じで"答え"ではない）→④信頼「見つかっても見つからなくても、自分で取り組んでるの、お母さんちゃんと見てるよ。あせらなくていい、いっしょに探そう」とそばで待つ 「本文に返す」一本を、範囲を狭める段に。苦しければ一呼吸入れて（クールダウン）、③まで下りて今日のうちに片す。翌日には持ち越さない
7 字が読めない	読めない字→「それは"〇〇"って読むよ」（読みだけ教える）／意味→「まず最後まで読んで前後から意味を推してみて。読み終わってもまだ引っかけた言葉だけ辞書で引こう」 読み＝OK。意味は"読解を止めない"ため読了後に辞書。内容(答え)は教えない
8 言えた	「本を閉じたまま、自分の言葉で言えたね。自分で本文をたどって見つけた、その探し方がいいね」／(1)(2)(3)全部言えたら「3つつなげて、一つの話にすると？」で通し説明 賢さでなく"探し方（過程）"をほめる。最後に3つを統合＝理解が固まる
9 確認へ	「最初の予想、当たってた？ どこが違った？」→要点チェック（間違いは「本文のどこを見たらいい？」）→演習前半は「まず本を閉じて鉛筆で埋めて（わからない空欄は空欄でOK）、埋め終わってから📖のページで自分で丸つけ・直し」 穴埋めは"見ながら"だと写経になる→閉本で埋めてから答え合わせ。応用（演習後半）はまだ入れない

定着ライン（次に進んでよい線）
本文を伏せて自分の言葉で言えたらその場はOK。次の(1)を1つ読んだ後にもう一度「さっきの言える？」で言えたら定着（すぐ言えるだけだと錯覚が起きる）。丸写しの音読は「本を閉じて、もう一回」で戻す。※子に「不合格」とは言わない。

この型が効くのは「本文＝答えの源」の理科・社会だから。次回の最初に30秒だけ「先週の〇〇、本を閉じて言える？」を1問（前回の要点チェックから）＝間を空けた再生で定着する。仕切り直し・お母さんの支え・していいこと/しないことは2枚目へ。

お母さんの支え（安全網） — これが初週を守る

「答えを言わない・打ち切らない」は、逃げ場と、お母さん自身の支えとセットで初めて安全に回る。

仕切り直し線 — 苦しくなったら一呼吸（でも今日の分は今日のうちに終える）

次のどれかが出たら、いったん手を止めてクールダウン。ただしその日の学習はその日に終わらせる（翌日に持ち越さない）。

- ・ 同じ(1)で本文に2回戻しても言葉が出ない
- ・ 涙・「もういや」・体のこわばり・黙り込みが続く
- ・ 1つの(1)から15～20分動かない

仕切り直し方：「いったんお茶にしよう／少し体を動かそう」で2～3分クールダウン → 戻って場面6の段を下りる（①範囲→②位置→③最初の一文と一緒に音読）。③まで下りれば、答えは言わなくても今日じゅうにそこは片づく。先に(2)(3)をやって、最後に戻ってもよい。

お母さん自身の1手 — 答えを言いそう／イラッとしたら

- ・ 口を閉じて、自分が3回ゆっくり息を吐く
- ・ 「お母さんお茶飲むね、汐里は本文もう一回見てて」で15秒その場を離れる
- ・ 言いすぎた・急かしたら、隠さず修復：「さっき急かしてごめん。もう一回いこう」

破ってもやり直せる。修復もこの方法の一部。1回の崩れで方法ごとやめない。

しないこと（4つ）

- ・ ゼロから説明を始める（＝先に答えの中身を言う）
- ・ 「違う」と正誤を裁く（→場面5の照合で気づかせる）
- ・ せかす・ため息・「まだ？」（→仕切り直しがお母さんの1手へ）
- ・ 語句の意味を教える（読みはOK、意味は辞書）

していい3つ（気持ちには全力で寄り添う）

- ・ 気持ちに名前をつけて受け止める「難しいよね、いやになるよね」
- ・ そばにいる・触れる（肩に手、隣に座る）
- ・ 過程を実況する「さっきより早く本文の場所見つけたね」

中身の答えは言わない。でも気持ちには寄り添っていい。言えなかった日も「あきらめず本文に何回も戻ったの、見てたよ。それが一番大事」。

初回の入り方（最初の1回だけ）

いきなり始めず、汐里に選ばせる：「今日から、お母さんは"教える係"じゃなくて"生徒係"をやってみたい。汐里が先生。やってみる？ うまくいかなかったら一緒に見直そう」。本人がうなずいてから場面1へ。方式は本人と一緒に始めた、という記憶を作る。

受け身の子に「答えを与えない・でも今日のうちに終える」を実演なしで始めるほど、この安全網（仕切り直し・お母さんの1手・していい3つ・初回の合意）が効く。まず1回やって、子の反応（涙・沈黙・翌日の拒否感）を見て調整する。

中立フレーズ カンペ（手元に置く用）

迷ったら、この3語だけ思い出す。

説明させる（先生役）

「お母さんに教えて。何がわかった？ どうしてそうなるの？」

詰まった・あやふや（照合）

「それ、本文のどこ？ 指さして読んで。さっきと同じこと言ってる？」

苦しい・止まった（信頼）

「取り組んでるの、ちゃんと見てるよ。いっしょに探そう」

場面ごとの一言（早見）

1 とびら	「この質問、なんでだと思う？ お母さんよく知らないから後で先生（汐里）に教えてね」
2 読む	「この(1)だけ、図も見ながら読んで。読んだら本を閉じて」
3 説明	「先生、お母さんに教えて。何がわかった？」＋「それで？／どうしてそうなるの？」
4 詰まる	「その答え、本文のどこに書いてあった？ 探して指さして」
5 間違い	「本文のどこ？ 指さして読んで」→「さっきと同じこと言ってる？ ちがう？」
6 止まる	①どの小見出し？→②最初の数行／図？→③最初の一文いっしょに音読→④「取り組んでるの見てるよ、いっしょに探そう」→つらければ一呼吸→③まで下りて今日じゅうに
7 読めない	字→「"○○"って読むよ」（読みだけ）／意味→「最後まで読んで前後から推す→残った語だけ辞書」
8 言えた	「自分で本文をたどって見つけた、その探し方がいいね」→「3つつなげて一つの話にすると？」
9 確認	「予想当たってた？」→要点チェック→演習前半「閉じて埋めてから📄ページで丸つけ」

つらそうなら（仕切り直し）

2回戻してもダメ／涙が続く／15～20分動かない → 「いったんお茶にしよう」で2～3分クールダウン→戻って場面6の③（最初の一文を一緒に音読）まで下りる。答えは言わず、今日のうちに終える。

お母さんがイラッとしたら

3回息を吐く／「お茶飲むね、本文見てて」で15秒離れる／言いすぎたら「ごめん、もう一回いこう」。破ってもやり直せる。

まずこのまま1回やってみて、使いにくい言い回しがあれば1つだけ直す。机上で完璧にするより、実地の1回が台本を洗練させる。